

天回醫簡の漆經脈人形について

猪飼祥夫

日本醫史學會關西支部長、立命館大學白川靜東洋文字文化研究所客員研究員

龍谷大學國際佛教センター客員研究員

四川省成都市金牛區天回鎮土門社區衛生站の東側、通稱老官山で醫學に關係ある人物の墓 M3 が發掘された。大量の醫學の竹簡が出土し、同時に髹漆經脈人像（漆經脈人形）が發見された。漆經脈人形は器物編號 M3-44 であり、高さは 14.9 センチ、両手の臂は最も寛いところで 5.1 センチで厚さは 2.6 センチで乾いた重さは 56 グラムである。人形の表面には赤い綫と白い刻綫、黄色の圓點と文字があった。

この漆經脈人形の頭面、四肢、關節、小腹、腰背處に彫り込んだ細小の圓點がある。111 個（島山奈緒子先生調査）である。これらの圓點は、「輪」「兪」と竹簡では呼ばれている。肩頸、胸、背、脅、肘窩、臑窩處には彫り込んだ銘文 20 字がある。體表には全身を縦貫する 22 條の紅色漆で描かれた綫が分布している。張家山、馬王堆出土古脈書中の十一經脈と大體對應している。あわせて 41 條の刻まれた綫は、同じ墓出土の醫簡《脈書・下經》中の十二經脈と間別脈と相關している。

赤い綫は 22 條、身體の兩側にあり、左右對稱で縦方向に分布する。それぞれの側面には、毎側各 11 條である。片側 11 條の赤い綫の中で、正面は 5 條、背面には 4 條、側面には 2 條があり、その循行路綫は『靈樞』經脈記載の十二經脈中の 9 條の經脈と比較的相似し、張家山、馬王堆出土古脈書中の十一經脈と大體對應している。

體表の陰刻の白色の細い綫は 29 條ある。横に走るものが 3 條、縦に分布するものが 26 條である。發掘報告者によって陰刻の綫は刻壹から刻拾壹と刻子から刻亥の干支名によって 12 分類されている。刻壹から刻拾壹は、赤い綫の紅壹から紅拾壹の 11 條に對應している。白い刻綫、壹から拾壹は指先、足心、掌心から畫がれており、赤い綫より發達した形をしている。

刻子、刻丑の綫以外は今日の經脈學說に對應する名稱は見られない。刻子は心主の脈、刻丑の脈は任脈に對應していると考えられる。刻寅は背部の太陽脈と少陽脈の間を走る脈で、後の太陽脈が背部で 2 條の綫になっている原型かも知れない。發掘報告者は竹簡 240 の「間別少陰脈」との關係を指摘するが、竹簡 238 の「間別大（太）陽脈」と關係あると思われる。刻卯は非常に變った走行である。前胸部に分布する。やや臺形型に近い。左右とも刻巳に至る。内容は不明である。

刻辰、刻巳、刻午の 3 條の白色の環狀綫は、體幹の前面乳根の水平面と、季肋の水平面、臍の下 2～3 寸の水平面で、どれも皆大體身體を一周している。刻辰は、乳房の下を通る横斷綫で左右の背部肩甲骨の下に至る。長浜善夫・丸山昌朗の『經絡の研究』p45 に記載する T8 の經脈に近いと思われる。左右とも足の太陽脈に至る。左右は繋がらない。刻巳は臍上を通る横斷綫で背部に至る。帶脈よりやや上にあたる。『經絡の研究』p43 に記載する腎兪の響きに近い。2 本ある上の綫である。足の太陽脈に至る。左右は繋がらない。刻午は臍下部を通る横斷綫で背部に至り斜めに上がる。

『経絡の研究』p43 に記載する腎兪の響きに近い。二本ある下の綫である。足の太陽脉に至る。左右は繋がらない。綿陽の経脉人形に同様の綫がある。刻辰、刻巳、刻午の3条の白色綫は、後の三焦が上焦、中焦、下焦と三部位に分割される初歩的な経脉であると思われる。その関係性は今後の研究に委ねられる。

刻未は、乳下の刻辰と刻參（足の陽明經）の交點から左右の脇に斜めに走る綫であり、股關節部に至る。走行の方向は不明である。左右は對稱である。また腹部と背部で刻酉と對稱であると思われる。刻申は、非常に特異な綫を畫かく経脉である。肘の内側から腋窩をへて肩甲骨をぐるっと廻り肩から頸部の左右にいたる。發掘報告者によれば、『靈樞』経脉の小腸手太陽之脉の循行路綫中に「上循臑外後廉、出肩解、繞肩胛、交肩上、入缺盆絡心」とあり。これは刻申の走行と相符するとしているが、果たして『靈樞』の手の太陽脉と同じか不明である。刻酉は、背部の肩甲骨下部内側の刻辰と足の太陽脉の交點から、股關節部に至る。走行の方向は不明である。左右は對稱である。腹部と背部で刻未と對稱であると思われる。

刻戌は大腿部後部内側で膝窩の足の太陽脉から分かれて陰部に入る。發掘報告者によれば後陰に入るといふが、前陰かもしれない。刻亥は、左では下腿の外側で外踝の後ろから足の少陽經に至る。右では外踝の後ろから足の太陽經に至る。この刻綫は、左右で異なり、短いので経脉とするより、刻するときの彫り間違いによるものかもしれない。

その他に「間別」の脉を記載する竹簡がある。そこには齒脉、臂陽脉、臂陰脉、肉理脉、贊、迎脉の記述があり、先の赤い綫と白い刻綫とどのように對應するのか明らかではない。今後の研究に残されている。足太陽路という脉、足陽明脉支者という脉があるが、先の體表の畫れた綫との関係は明らかでない。

経脉人像の體表上の圓點は、多くはきざまれたやや深い小孔である。部分的には比較的淺い圓形の彫痕である。大部分は正圓の形態であり均く直徑は約1ミリである。上肢及び足部の少量の圓點を除く外は、その餘は皆左右對稱で分布している。これらは基本刻劃の経脉の綫上に分布している。圓點がまず切り込まれて、のちに刻劃の綫が體表に切り込まれた。圓點は竹簡の中では「輪」もしくは「兪」書かれている。五臟の名稱の左右の圓點は「輪」と呼ばれている。圓點と経脉を表す綫との関係は今後の課題である。

経脉人身上には鑄刻文字で20字の銘文がある。具體的な分布情況は、兩側の腋下の脅の正中の「夾淵」、兩側の鎖骨の處の「央盆」、雙乳聯綫のやや右の五ミリの處の「虛」。雙側の股髀の上の「谷」、肘窩の兩側附近及び臑窩の兩側の下縁の四か處の「奚」、背部脊柱上の上から下にいたる「心、肺、肝、胃、腎」である。銘文と経脉との関係も今後の課題である。

『天回醫簡』の漆経脉人形の出現によって、これまでの鍼灸の経脉學説が、400年から500年遡ることになった。『黄帝内經』の成立から今日の経脉學説になるまでに大きな變化があった。この人形の出現によって『黄帝内經』以前の経脉が明らかになり、その聯續性と差異が今後の研究課題として出現した。十二経脉の祖先となる経脉が、赤い綫と白い刻綫の刻壹から刻拾壹となり、さらに心主の脉、任脉が加わり、刻寅から刻亥までの脉となった。

『逆順五色脉臧(藏)驗精神』と『友理』では、石法と友法が並行し、一對になった治療方法として述べられている。石法は砭石の治療である。友法は多分小刀や金属の鍼を用いた治療である。竹簡には石法は脉を治療し、友法は輪を治療するとしている。脉を治療する石法は、古典的な赤い綫を治療していたと思われる。それは馬王堆や張家山の十一脉の経脉に外ならない。輪を治療する

友法は、黄色い圓點を治療していたものと思われる。その後脈と圓點を合體させた經脈圖が完成してきたと考えられる。それが刺法である。それは後に毫鍼の治療に変化していくと推察される。灸法は石法の脈を治療する上に形成されたのではないだろうか。

今回は初歩的な全體像を窺うだけであったが、今後の研究に残された課題は多い。傳世文獻から經脈を研究するより、今後は出土したものを中心に研究すべきだと思われる。多くの共通する醫學書が出土したことによって、醫學書の普及がすでに前漢初期にあったことが考えられる。